

ほたる草

大阪市天王寺区東高津町12-10
 大阪市ボランティア情報センター内
福祉と住環境を考える会「ふくてつく」
 発行責任者 代表：杉浦史郎
 TEL 06-6765-4041
 高齢者や障害者の住環境
 改善を目指すボランティア
 グループです
 ホームページ <http://www.osakacity-vnet.or.jp/link/hukuteku/>



5月定例学習会
 平成12年5月13日(土)
 榊グリーンソフトカンパニー
 スーパーバイザー
 大澤 皓年氏

* * *

講師の大澤皓年氏は、園芸研究家として多方面で活躍されているが、水耕栽培の分野で独自の技術を具体化され注目を集められている。

氏のお話によれば、園芸療法とは18世紀初頭にスコットランドに始まるのだが、我が国にも、例えば盆栽などのように古くから広く親しまれてきた物である。

実際、日本の庭園技術という物は世界にも類を見ない優れた文化であると言える。

考えてみれば、人類は太古の昔から植物を育て、そう



植物を育てる事が心を癒し 生活を豊かにする

り誰に強制されるのでもなく、打ち込める自分が嬉しかった。

5人寄れば5人が考えを異にする人たちが、それぞれ自分の言葉で語り合う場を楽しむ事が出来た。

みんな、いい顔をしているなあ。

あの「反体制(あんぼ)」の頃は、みんな青ざめていた。そして「体制」の頃は、皆、表情を失っていた。

NPO(うんぼ)は「反体制」で行こう、やつと「自分」になれる・・・そんなふうに想う一平だった。

峠超え 翠がさそう
歩みかな

活動懇談会報告

5月
 新年度体制に関して
 ①昨年度不調に終わった活動記録のデータベース化は、新年度こそ実現して行きたいが、それは総務部によるのではなく各事業部に於いてシステムを考案して遂行する。

②会員がそれぞれの自主的な動機を活性化して活動に積極的に参加できる環境をつくる為には、例会や懇談

して営みをたてる事を営々と続けてきたわけで、それがすっかりDNAに刷り込まれている。

だから当然のことのように、人は植物を育み、その花や実の美りに対して喜びを感じるものであり、これは高齢者や障害者に限らず、全ての人に共のテーマである。子供たちの情緒安定や人格形成にも寄与するところが大きい。

ところが、観葉植物や花を室内に取り込もうとするとき、そこには一つの障壁があった。それは土の存在である。土の中には、膨大な菌類が生息していて、その中には善もあれば悪もいる。そうして、屋外にあっては太陽光の紫外線による殺菌力もあって、自然界の微妙なバランスの中で悪の横暴が制御され、土は大変すばらしい命のゆりかごになつているのだが、不用意に室内にとりこんでしまうと、その温湿度環境が雑菌にとつて格好の繁殖環境になつてしまつて、大変な事になつてしまう。



トマトの水耕栽培

特に、高齢者や病人のようには、抵抗能力が低下している人にとっては致命的な影響になりかねない。だいたい、年間に死亡する百万人規模の人数のうち、交通事故や病気等の原因がはっきりしているものはたかだか数万人〜10万人に過ぎず、大部分は最終的には菌類の繁殖によつて、生命が絶たれると言われている。

振り返れば、蝨燭や暖炉の炎、赤煉瓦の家、食品を保存する竹の皮や杉樽など、菌類の侵入や繁殖を防ぐ自然材の効用が、知らず知らず生活文化や習慣として根付いてきた物が数多く存在するものだ。

そこでヨーロッパに始まつた水耕栽培(ハイドロカルチャー)が日本にも伝わったのだが、それは土に替えて小さな水を使用していたため、倒すところばれるとか、高価であるとか、様々な問題があつて、我が国にはさほどに普及できなかった。



福祉住環境センター「検定試験」のバス乗降の様子

ある。水耕栽培には、植物自身が出す老廃物の始末や気性、根腐れの防止、栄養の供給など、多くの課題があるのだが、氏はこれに独自のアイデアを持ってキーボードカルチャーという手法を考案された。これによれば、ヨーロッパから伝わった物に比べてはるかに安価でしかも様々な欠点もカバーすることが出来る。なにより水耕栽培の特徴である軽さは、高齢者や障害者にとつて有り難い事であるし、土による栽培と違って均質な生育が可能なので、例えば障害者の授産事業等にも大きな道を拓くものである。

現実に障害者の作業所としての取り組みも始まっているが、既往の作業と違って障害者が本心に喜んで作業に就いているのも、大きな特質である。まさに植物を育てる事が心を癒し、生活を豊かにする事を改めて認識せざるを得ない。

しかしまあ、土がないのにハイドロとはこれいかに・・・

※注釈 ハイドロは水、カルチャーはアグリカルチャー(農業)の一部。カルチャー(教室)ではありません。
 (記 中北 清)

おじさんは死ななす
昔あんぼ
今うんぼ
中北 清

貴船口から、つづれ折れの「木の根道」をほぼ登りつめて、魔王殿のあたりで一平は一息をついた。汗ばんだ首筋を杉林の涼がなで、はるか頭上にキツツキの音が響く。

そう言えば・・・一平はなつかしうに30年前を振り返っていた。

若者の目には、原点を置き去りにしたまま、繁栄と秩序を追求する実社会が巨悪に見えたものだ。怒りの矛先が「体制」に向かったのは当然のことだった。夢にうなされるように闘い、疲れ、そして若者は死んだ。友たちは、いつしか何事もなかったように「体制」に生き、「体制」を支え、「体制」を牽引する身となった。「反体制」から「体制」への転身、それは、一平として例外ではない。若輩の頃から膨張し続けた社会に飛び込み、そして石油ショック、バブル、やがて長い不況ともまれ続けた人生だった。

この島国をこまごまにしていたのは間違いなく俺たちだ、と一平は信じた。

けれど、ふとあの時のむなしさが胸をよぎる。

よく闘った・・・でも・・・つかれ・・・た・・・

ふふふ、一平はひとり笑っていた。人々の喧噪は既に木々の重なりで失せ、山々は輝く日向と凛とした陰が綾をなして、命ある物のように緑風に揺れている。何も変わらないうちやいな。もう一度、やってみるか。

実は、一平はこの数年、ひとつの夢を暖めていたのだ。まだまだやらなきやいけない事は、山ほどもある。けれど、闘うのはやめよう。思えば、「反体制」も「体制」も、「自分」があるようではなかった。「自分」をとりもどすのは「脱体制」だと見えてきた一平だった。

麓から初老の男性が登ってくる。いい顔をしているなあ・・・

一平がそんな気持ちになつたのは、ふとした事から加わつた市民活動がきっかけだった。彼が仕事で成し遂げてきた成に比べて、おそろしくなるに足らないだろう事が、何故かとても大切な事に思え、なによ

会議事、その他に関わる情報を速やかに全会員に均等に伝達する事が肝要である。

新年度は総務部の重要な役割の1つとして、情報伝達の迅速化に努める。これに応じた信頼を充実する。

③ 例会司会進行は事務局長に偏せず、数人の輪番とする。

④ 各事業部にそれぞれ口座を開設する事は混乱を招くので、出納口座は総務部に一本化し、各事業部の会計は経理処理のみとする。

⑤ 総会で提議された会計原則は、今後対応していきたい、社会福祉法人会計規則になじませる必要があるので、秋岡顧問と中北事務局長にて再検討を加える。

⑥ 発展事業部Bで取り組む課題のうち、福祉施策に関する提言分野は、ふくてつくの今後を決定づける重要な課題なので真剣に取り組みたい。5月30日に第一回の研究会をもつてスタートし、9月例会に向けて方向を打ち出したい。

⑦ 美原の件は、予定り本年に補助協議を成立させるべく、近々に構想の草案に入る。

⑧ 奈良の件は、杉浦代表の

指示を待つて、その全支援体制をとる。

⑨ 神社施設のバリヤフリー研究もいよいよ始まる。

⑩ 子供木工教材づくりは麒麟財団の助成によるとの事であったが、財団助成だと発布部数が限られるので、むしろ出版社にもちかけて販売できる内容をねらつた方がよい。いずれにしても企画書を早急に作成する。

その他

① 宇賀神さんからの応援要請については、中北が再度連絡協議したうえで対応する。

② 7月例会の講師予定は曾根さんだが、畑、三浦両会員を加えた鼎談方式とする。

6月(例会及び懇談会)例会では、先月の総会で一応可決された新例会則その他が改めて追認された。

また、いよいよ本年に当会もNPOをめざして胎動する事が賛意を得て、畑会員をリーダーとする特委員会が発足する事になった。早速、定款にうたうべき活動内容についての検討も始まり、参加会員から多くの目標が示された。

懇談会では、既にスタートしている「神社のバリヤフリー研究」と「美原障害者施設プロジェクト」についての経過報告があり、前者については三浦会員をリーダーに進める事が、後者については当 佐藤・中北両会員が基本構想を練る事になった。

また、前述のNPO設立がらみについて、9月例会でその討議を深める予定が決まっている。

(記 中北 清)

編集より

*ふくてつくの基本事業である住宅改造の事例報告を掲載できませんでした。進行途中のものはありませんが、完了して報告できる状態になつていません。ご了承ください。

*みなさんからの投稿をお待ちしています。

違うことこそええことちや 一人一人の違いを大切に



6月定例学習会
平成12年6月3日(土)
障害者文化情報研究所
所長 牧口 一二氏

私は阪神大震災の時に、あのような非常時においては、障害者がどうしても後回しになって大変難渋をするという実態を見て、平常時からその備えをしておくことが大切だと痛感し、「ゆめ・風・10億円基金」を起して来た。

これは、目標として10年間で10億円規模の基金を蓄積する事と、いざというときに頼りになる、ふくてくのような団体とのつながりをつくるのが課題だ。最近では有珠山や台湾の被災地への援助活動をしてきたが、本当に必要なところをきめ細かく対応したい

と考えており、「平等の原則」には、基本的な疑いを持つては、公的なお金というものは、得てして小回りが利かない物で、私たちがゆめ風ネットという組織(現在、全国に21団体、目標は200団体)を動員して、障害者の援助を自由に、そして確実に実施したいと考えている。

「ゆめ・風・10億円基金」はもったNPOとはいえないので、現在集めた一億八千万円のお金は個人名義になっている。NPOにしにくい理由は、10億円集める目標はすなわち、2年間かけて一人当たり一万円(年に千円)くれる人を10万人集めるということとで、既に9000人の会員がいるのだが、NPOにするとなると、実に9000人の会員のNPOということになって、総会を開くにも4500人の会合になり、大変である。それに、NPOにすると、

集めたお金を公表しないといけないから、これをねらう輩がでてる。そもそも福祉の人というのは、人の善意をベースにしているのだから、だまされやすいのが常である。

話が変わるが、NPOの定款に会員や理事役員の資格に、いわゆる欠格条項というくだりがあるが、けしからん事である。ふくてくもNPOにされるのであれば、言葉の意味を厳格に検討して、けつして安易な文にはされないよう願いたい。

の方)のためにデザインされた椅子が、日本の物とドイツの物が紹介されていたのであるが、日本の物はというと、とにかく身体的な不具合に対する工夫に終始して、結局本人を束縛し、器に閉じこめてしまうという物でしかなかった。それに對し、ドイツの物は様々な色使いも美しく、何気ない雰囲気であって、あくまでも本人が主体、椅子が人に合わせて形を変える柔軟さと、しかしながら大切なところはしっかりとフォロワーしているというものであり、あまりに大きなギャップが示されたのである。

今から8年も前の一大ショックであったが、思えば日本社会の現状は、この時と何も変わっていない。気付いている人は多いはずだが、どうして世の中を変えられる事ができないのだろうか。その1年後にまた大きなショックが私を襲った。それはカナダからやってきたマークウエルという人が、廃屋を手作りで改造して、障害者が住むアパート造りをしていくという話を聞いて、見聞したときの事だ。

として同じ物はなく、障害者夫婦のための部屋まである。とにかく、いろんな人の事が考えられてある事自体が、心を温めてくれる。今では当たり前前かも知れないが、キッチン下部が開放で、車イスで利用できる配慮や、コンセントの高さにも色々あつて、8年も前にそんな事を考える人がいたことは実に驚きだ。

また、インテリヤの決定もデザイナーが決めるのではなく、生活する本人の意思を尊重する事、大きな部屋を何に使うかといった計画さえも、生活者に委ねるという発想に、本当に世界が違うなと感じたものだ。

一人一人の違いを大切に
する発想だ。



(記 中北 清)

定例会のお知らせ

8月 休会
9月 9月2日(土) 午後1時30分〜5時
場所 大阪市社会福祉センター 3階会議室(予定)
内容 NPO法人化・ふくてく々の活動展望についての討議。福祉施策への提言。



OCVIC市民塾 「日曜大工教室」



大阪市ボランティア情報センター主催で日曜大工教室が開催されました。この講座は日曜大工をじて、ボランティア活動に取り組みきっかけを作ることを目的としています。

2月16日(土)、ボランティア活動の基礎話し・活動体験・工具の紹介に始まり、実技へと進みました。焼杉プラランター・スパイスラック・花台と4月23日(土)まで計6回の日程が無事終了し、それぞれの作品は木工部会スタッフの熱心な指導のもと、満足のいく出来あがりとなりました。

ただし、今後もより良い講座にしていくと頑張っています。ただ、実技中心でしたので、目的としていたボランティア活動を始める人が現れなかったようですので、5月20日より始まっている2回目からは、実技を減らしてATCでの高齢者疑似体験や懇談会を取り入れ、ボランティアに関心を持ってもらえる内容になっています。(記 和泉 秀子)

大工教室・木工教室



大阪市子どもカーニバル

4月23日(日)、大阪城公園太陽の広場で開催された「大阪市子どもカーニバル」に「木工体験コーナー」のスタッフとして参加しました。

この日は良く晴れたとても気持ちの良い天気だったせいも、会場は朝から大勢の親子連れで賑わっていて皆楽しそうでした。



そんな中、オーブニングセレモニーが終わらうちから、子ども達が物珍しそうにやってくる。「何を作ってもいいんですか?」と嬉しそうに工具を手に。あつと言

子ども木工教室

4月2日(日) 阿倍野でエフ・エー主催、5月3・4日(祝) 中之島まつりで、共して感じたことは、子どもは好きなようにやるのですが、自分ひとりの力だけでは、なかなか思うようなものが作りにくいというこ

う間に人数が増え、会場を急ぎよ拡張する程の賑わいになり、結局延べ100人くらいの参加になったように思います。

最初は危なっかしい手つきで作業する子ども達に、怪我をしないかと「ひやひや」して見ていたのですが、皆慣れないながらもそれなりに、「のこぎり」や「金づち」を使いこなして、思い思いの作品を見事に仕上げているので感心しました。

親子連れの参加者も多く、お父さんの方が張り切っておられたようにみえたのは、気のせいでしょうか。会場の後片付けに入ってから、出来上らずに作業を続ける子ども達もいました。参加された方々の心から楽しんでおられる気持ちを、強く感じる事ができた一日でした。(記 山本 尚子)

中には創造性を働かせて立派なものを作っている子もいますが少数です。親子で作っている場合、お父さんやお母さんがかなり手伝って、色んなおもちゃが出来あがります。スタッフをつかまえて、自分の満足いくように手伝わしてもらおう子もおり、「おぼちゃん、〇〇にして。」と言われ、やつてあげると子どもは満足し、そこには心とです。



あべの市民教室

5月14日(日) あべの市民教室では、両方とも中年の方ばかりでした。初めて作る喜びが、子どものように無邪気になっておられる様子から感じ取られ、うらやましく思いながら見ていました。

木工教室、大工教室をして感じることは、木は地球上での一つの大切な生命です。その木の特徴をとらえ、自分の中にある創造性を物作りに生かしていく、そんな教室ができたならなあ・・・なんて考えている私です。もしかしたら、夢が実現するかしらなにかは、私自身の心の中にあるのかもしれない。(記 光川 隼子)